

全国各地のホタル祭の分析とポスター等のデザインの考察

梶 田 博 司

川崎医療短期大学 医用デザイン科

(平成9年9月17日受理)

An Investigation of the Events Concerning Fireflies
in Various Parts of Japan

Hiroshi KAJITA

*Department of Medical Illustration and Designing,
Kawasaki College of Allied Health Professions
(Accepted on Sep. 17, 1997)***Key words** : デザイン, イベント企画, 発光生物

概 要

1996年のホタル発生時期の6, 7月にホタルに関するイベントの全国的調査を行った。マスコミ等で紹介された市町村, 団体等, 計60ヶ所に対し資料を請求したところ, 54ヶ所(90%)より応答を得た。その結果, ほとんどはゲンジボタルを対象としていたが, ヘイケボタル, ヒメボタルを観賞する地域も存在した。さらにクロマダボタル, オバボタルも含め5種も見られる地域が2ヶ所あった。観賞は自由散策のほか, 専用施設で眺めるもの(6ヶ所), 遊覧バス運行(7ヶ所), 高瀬舟乗船(3ヶ所)とバラエティに富む。イベントは音楽演奏, カラオケ等の余興を主とするものと講演会, 展示等の教育主体のものに大別される。全体の半数はポスター・チラシを作成していたが, それらのサイズ, 題材, 仕上げはまちまちであった。マスコットマークがあるのは13ヶ所ではほとんどは性別なしの幼児的姿であった。雌雄が明確に区別されていたのは2ヶ所のみであった。

はじめに

農薬の大量使用と河川改修によって各地のホタルは大打撃を受け, 名だたるホタルの名所も有名無実となっていた。しかし, 農薬の危険性が指摘され, 身の回りの自然環境に関心が高まるにつれて再びホタルが注目されはじめた。今や自然が豊かなことが即ち良好な生活環境であるかの如くに語られている。これを背景に各地で「ホタル」と銘うった催しが乱立気味である。ところがホタルの成虫が飛翔するのはわずか1週間から10日程で, 自分自身の居住する近辺のホタル祭に参加することすら十分にはできにくい。ましてや他県の様子がどうであるかは存外,

知らない状況である。ホタルサミット, 日本ホタルの会に出席を重ねるうちに, 各地の行事は思いのほか, 相違点があることを知り, 全国的調査を行うこととした。

方 法

新聞, テレビ等のマスコミや自然保護関係の機関誌あるいはアウトドア趣味の出版物, 旅行誌等で紹介されたホタルのイベントを計画中の地方自治体, 各種団体, 各種施設の合計60ヶ所に対してイベントの内容, 広報用印刷物(ポスター, チラシ類), マスコットマークの有無と名称, イベント関連グッズ等が判別できる資料を書面で請求した。請求先は表1の通りである。

		資料 提供の 有無	ホテルの種類					観賞方法				ポスター・チラシ			マスコットマーク			その他 イベント行事の内容、 ユニークな取り組みなど	関 連 グ ッ ス		
			ゲンジホテル	ヘイケホテル	ヒメホテル	クワッドホテル	オパホテル	養殖施設の有無	専用建物	遊覧バス	高瀬舟	自由散策	有無	サイズ	題材	印刷方法	有無			愛称	特色
31	滋賀県坂田郡山東町 山東町役場	○	○									○	A4	イラスト	多色刷	○	—	妖精風	保護条例、ホテル科学館、ホテル音頭		
32	京都府京都市右京区嵯峨清滝町 清滝町保勝会	○	○								○								公表・宣伝せず、巡視・看視活動のみ		
33	京都府綴喜郡井出町 井出町役場	○	○																ホテル公園		
34	和歌山県那賀郡貴志川町 貴志川町役場	○	○								○	○	○			○	ホタテ	イチゴ抱く	ホテルの里	Tシャツ、置物、キーホルダー	
35	鳥取県鳥取市浜坂 樽路ホテルの会	○	○	○															保護活動実施中		
36	鳥根県大原郡大東町 赤川はたる保存会	○	○								○								保護条例、はたる公園、神楽	テレホンカード、絵ハガキ	
37	岡山県岡山市足守地域 大井しいの木いきいき会	○	○								○	○	B4	解説	多色刷				歩行者天国、太鼓、舞踏		
38	岡山県阿哲郡哲多町 哲多町役場	○			○							○	A2	夜景写真	多色刷	○	サーチ	スズラン持つ	保護条例、講演、写真展	テレホンカード、絵ハガキ	
39	岡山県小田郡矢掛町 矢掛町役場	○	○	○									○	B5	解説	単色刷			ホテル館（東京・大阪）、ホテルの送付		
40	岡山県上房郡北房町 北房町役場	○	○	○	○								○	B2	夜景写真	多色刷	○	—	性別あり	演奏	
41	広島県佐伯郡湯来町 湯来町役場	○	○	○	○						○	○	B4	行事予定	多色刷				神楽、太鼓、歌謡、カラオケ		
42	広島県双三郡吉舎町 吉舎町役場	○	?									○	B4	イラスト	単色刷				予約制（有料）	うちわ	
43	山口県山口市 山口市役所	○	○								○	○	B2	夜景写真	多色刷				コンサート、映画、児童作品展		
44	山口県豊浦郡豊田町 豊田町役場	○	○								○	○	○	B5	イラスト	多色刷			演奏、太鼓、火花、ホテル音頭		
45	徳島県麻植郡美郷村 美郷村役場	○	○								○	○	○	B2	イラスト	多色刷	○	夢太、郷美	着衣正装	フォーラム、コンサート、人形劇、獅子舞	マスコットマークのシール
46	徳島県海部郡海部町 海部町役場	○	○										○	B2	切絵	多色刷			演奏、カラオケ、茶席	テレホンカード、うちわ	
47	徳島県三好郡井川町 井川町役場	○	?																ホテル激減のため行事休止中		
48	徳島県三好郡山城町 山城町役場	○	○	○									○	B4	手作り	単色刷			はたるの里、カラオケ		
49	香川県香川郡塩江町 塩江町役場	○	○								○	○	○	B3	イラスト	多色刷	○	ピカちゃん	中性的	コンサート、人形劇、ホテルのプレゼント	テレホンカード
50	愛媛県今治市 今治市役所	○	○	○															ホテルの里		
51	愛媛県大洲市 大洲市観光協会	○	○									○	B2	組み写真	多色刷				神楽、映画、カラオケ		
52	福岡県筑後市 筑後市役所	○	○																ジャズと邦楽演奏		
53	福岡県福岡市早良区 福岡市早良区役所	○	?									○	B4	地図	多色刷						
54	熊本県天草郡天草町 天草町役場	○		○	○														行事休止中		
55	熊本県球磨郡山江村 山江村役場	○	○								○								行事休止中（水害のため）		
56	熊本県球磨郡山江村 やま温泉はたる亭	○	○													○	—	蛍の形態			
57	大分県大分市長谷町 大分市ホテル生態研究会	—	?																		
58	大分県玖珠郡九重町 九重町役場	○	○	○	○														邦楽演奏、芝居、カラオケ		
59	大分県玖珠郡九重町 グリーンホテル九重	—	?	?	?														保護活動中？		
60	大分県玖珠郡九重町 川底温泉 旅館 螢川荘	○	○																	箸袋	

結果及び考察

資料を請求した60ヶ所のうち54ヶ所（90%）から資料の送付あるいはハガキ、電話による返答を受けた。それらを項目別に分類した結果を表1に示す。応答の得られなかった6ヶ所については事前の調査で判明している事柄については「？」で表示している。また、送られた資料には明確に記述されていなくても推察可能な項目についても同様に「？」で記載した。

1. ホタルの種類について

イベントの対象としてゲンジボタルが圧倒的である。大型で発光も強く「見栄えのする」ホタルであるので当然とも考えられる。しかし従来、ゲンジボタルが生息しなかったはずの北海道でも観賞できるのは明らかに人為的に持ち込んだものであり、環境保護の面から考えると好ましい事とは思わない。我が国に生息する44種のホタルのうちゲンジボタル、ヘイケボタル、ヒメボタルの3種が成虫となって強く発光し、観賞の対象とされるが、地域内で3種とも観察されるところが7ヶ所存在する。そのうちの2ヶ所はクロマドボタル、オバボタルも含め計5種も存在すると記述されていた。しかし、クロマドボタルもオバボタルも決して珍しい種ではなく広く生息するホタルであり、要は他の地域では関心がない、注目してないだけのことで、5種存在するから他の地域より数段に自然が豊かとは言えない。ホタルに関心を持ち、研究する個人、グループが存在するかしないかの問題であろう。ゲンジボタル、ヘイケボタルは水辺環境に生息する種であるが、ヒメボタルは水系を必要としない森林性のホタルである。生息環境がやや特殊と言えるこの種が9ヶ所で観察されていることは注目される。そのうちの何ヶ所かに問い合わせた限りでは種の誤認も考えられるようである。地域独特の呼称で、ミズボタル、ムシボタル、ヌカボタルなどと呼ばれているものが、果して本当は何であるかを突きとめる必要がある。魚と同様に、昆虫も地域内だけで通じる呼び名を持つ場合が多く、それらを精査すれば新種、亜種発見の可能性もありうるが、調査もされないまま、他地域の個体を持ち込むと交雑が進み元々の種類が消滅してしまう場合も起こりうる。

2. 養殖及び保護施設の有無について

集計結果によると養殖施設は11ヶ所、保護施設は19ヶ所となっている。ここで養殖施設としたのは独立した建物で独自に養殖している所であり、学校の理科室で飼育しているとか、展示場の水槽で育成している場合などは除いてある。養殖は意外に難しく、養殖場を作ったものの5年経過しても一匹の成虫の発生を見ない例もある。11ヶ所のすべての施設で毎年順調に多くの成虫が発生し、その地域のホタルイベントのすべてをまかなっているとは想像しにくい。そうした危惧を差し引いて考えても54ヶ所中、11ヶ所の養殖施設は少な過ぎるように考える。ここに養殖専門業者の活躍する素地がある。

保護施設としたのは、ホタル護岸（ホタルブロック）、ホタル池、ホタル水路などと呼ばれるホタルの生活に都合の良い環境を作っている所である。規模はまちまちであるが、少なくともホタルのためにと考えられた何かが存在する場合である。養殖施設を作る場合に比べれば費用も少なくすむし、一旦作れば以後は手間も費用もほとんど掛からないので、とりあえずはこれらの結果を見た上で将来には養殖も考える場合もあるようである。

都市化の進んでいない、豊かな自然に恵まれている地域では自然に発生する数で充分であるので、当然ながら養殖、保護施設を必要としない。

3. 観賞方法について

川沿いを歩きながらホタルを追ったかつてのホタル狩りも時代とともに変わってきている。6ヶ所では観賞専用の建物、構築物が用意されている。ホタルドーム、ホタル館と称されるものでホタルを放した建物内で見物人が観賞する場合やビニールハウス内で点滅するホタルを外側から眺める場合などがある。どちらにせよ自然の状態とは言えないが、安全に、確実に観賞できるという点ではメリットもある。

遊覧バス、高瀬舟を利用する例が計10ヶ所存在した。バスは前照灯を消し川岸を低速で走行するもので客は開け放った窓から眺める。無料と有料の場合がある。舟の場合はすべて有料で乗船料には巾（300円～1,500円）があるが、20位の客を乗せた高瀬舟が上り下りしながら、川

面から岸辺の草むらのホタルを楽しむという風情豊かな観賞法である。バス、舟のどちらも、ホタルの生息環境を見物人が踏み荒らす心配がないこと、まとまった行動を取らせることができるなどの点で優れた方法である。

自由に散策するのがもっとも自然な姿であるが川岸からの転落、草むらでの怪我、岸辺の踏み荒らしなど主催者側には心配の種も多い。9ヶ所が自由散策となっているが、言うまでもなく大半の地域はこの方法である。

4. ポスター・チラシについて

資料の提供を受けた54ヶ所の半数、27ヶ所でポスター・チラシが用意されていた。サイズは最大でA1判(594×841mm)から最小でB5判(182×257mm)まで、多色刷りから手作り白黒印刷まで実に様々であった。イベントにかける意気込み、予算が如実に反映されている。当初の予想では夜間、ホタルが乱舞している生態写真を題材とするものが多いと推測していたが、組み写真も含めて夜間の発光風景の写真使用は6ヶ所のみであった(写真1)。夜間の実写ではどうしても長時間露光とならざるをえない。すると、暗い背景に糸を引いて交錯する黄色の線としか撮影されない。これは多くの人々が思い浮かべるイメージとは相当にかけ離れた写真になってしまう。折角、実写フィルムを生かしてポスターを作成しても奇妙な印象の暗い仕上がりにしかならない恐れがある。イメージ通りにするためにはイラストレーション(写真2)、切絵等の創作画の方が適している訳で、多くの町村で採用されている。創作画の中でホタルの光は塩江町の1例を除き、すべてで丸い点々として表現されている。切絵を使用した2例(月夜野町、海部町)はどちらも郷愁を誘うためか、姉と幼い弟がホタル狩りをするシーン(写真3)を描いている。各地とも継続してイベントを企画しているので単年度の調査だけで断定はできないがホタル祭のように情感に訴える催しの場合には多くの人々が共有するイメージに添う方が無難なのであろう。

ポスター・チラシを一覧すると、市町村名は必ず記載してあるが、どの地方にあるのか、何県であるかが表示されていないのが大半である。地域に根ざした催しであるだけに広告も地元住

民、近隣市町村を対象として考案されているのである。全国的に有名になり、県外の各地からも観賞者が訪れる名所や著明なイベントになっていない事が判る。

5. マスコットマークについて

54ヶ所中、13ヶ所でホタルに関するマスコットマーク(キャラクター)が作られていた。そのうち3ヶ所はホタルの形状をほぼそのまま生かしたデザイン(写真4)であるが、それ以外のは大半は人間に近いイメージで幼見的、中性的の形状(写真5)であった。2ヶ所では地元の特産品を抱き合わせてデザインされていた。1例はイチゴを抱いて飛ぶ貴志川町(和歌山県)の「ホタ郎」(写真6)、もう1例はスズランをささげ持つ哲多町(岡山県)の「サーチ」である。

ホタルは昆虫の中では雌雄差が歴然としている方であるがマスコットマークに雌雄が別々にデザインされていたのは2例のみで大半は性別に無頓着であった。北房町(岡山県)では年齢に差のある雌雄(写真7)で描かれており、やや不釣り合いの印象を受ける。美郷村(徳島県)のもの(写真8)は雄は「夢太」、雌は「郷美」と個別の愛称も持っている上に、腹部の発光部の節も正確に描き分けられている。雌雄ともドレスアップした身なりをしており、ホタルの成虫の発光は擬人的表現をするならば「お見合い」、「結婚式」に臨む晴れ舞台であることを連想させる。表面的観察ばかりでなく、体の構造、行動の意味まで組み込んだ優れたデザインと考える。

マスコット・マークに愛称が付けられていたのはその約半数であった。愛称の有無はマスコットマークの使用頻度にも関係する。ポスターや会場の看板の一部等に表示されているものが、イベントを重ねるうちに、来場者に配るうちわ、シール、記念テレホンカードに使用され、やがてはモニュメントを作成するようになると必然的に名称が必要となる。また、関心を高めるためにそれまであったマスコットマークにニックネームを公募する場合もある。

6. その他について

地域の取り組みの態度、イベントの盛り上げ方等、それぞれの熱意と実状が読み取れる。保護条例を制定し、地域を挙げて守ろうとする所



写真 1

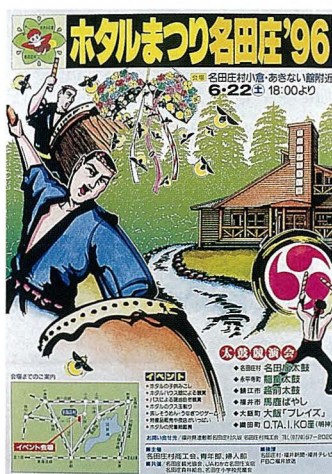


写真 2



写真 3



写真 4



写真 5



写真 6

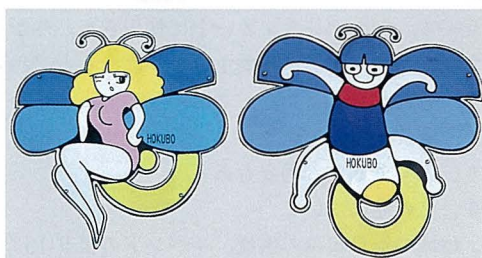


写真 7



写真 8

が5ヶ所ある。ただし、その内容には巾があり、我が町の自然を皆で守ろうと努力目標を掲げている条例から、ホタルを捕獲した場合の罰金まで記載されている条例もある。また、ホタルを増やすには、まず餌となるカワニナの増殖を計るべきと地道な活動を展開中の地域も認められる。

開催するイベントについても、フォーラム、講演会といった硬派のものから演奏会、カラオケのような余興中心のものまで存在する。余興を主体とする場合は派手な出し物を追いがちであるが、千匹から二千匹のホタルをくす玉に封じ込め、くす玉が割れる瞬間の光の渦をイベントの目玉にする例が徐々に広がる傾向にある。自然保護には逆行する催しであるだけに注意が必要であろう。ユニークな例として越路町（新潟県）の雪ぼたるがある。これは冬の夜空から降ってくるボタン雪をライトアップし、雪ぼたると名付け、冬にもホタル祭を開催、CDまで作り上げるという力の入れようである。

自然災害や防災工事の影響で環境が変化した結果、ホタルが激減し行事を中止せざるを得なくなった地域、ホタル保護のために一切の宣伝、広報を全く行わない地域、イベントを継続するため、すべてのホタルを業者から買い求めている所等々、それぞれの事情も浮かび上がってくる。イベントの内容から目的を推測するとホタルを観光の主役に仕立て、盛大なお祭りを企画し、多くの見物客を呼び寄せようとするもの、減ってしまったホタルを保護育成し、かつての名所として復活させようとするもの、ホタルを通して自然、環境について考える教育の場にしようとするものなどに大別される。この数年はホタルのイベントは確実に増加している。各地において、どのような内容が企画され、それがどう変遷し、定着していくか今後とも注目を続けたい。

なお、前頁に代表例として掲載したポスターとマスコットマークの出所と特色はそれぞれ次の通りである。

写真1：夜間に撮影した生態写真を全面に利用した辰野町（長野県）のポスター。とぎれとぎれの細い黄色の線がホタル発光の軌跡。

写真2：イベント内容をイラストレーションで紹介した名田庄村（福井県）のポスター。太鼓の競演がメイン行事。上部にホタルのくす玉が見える。

写真3：昔懐かしいイメージを切絵で表現した月夜野町（群馬県）のポスター。黄色の小さな丸でホタルの光を示している。海部町（徳島県）の場合と同じ姉と弟の組み合わせ。

写真4：ホタルの形状を生かしたマスコットマーク、越路町（新潟県）の「るんるん」、町役場の封筒、名刺にはすべてこのマークが入る。

写真5：子供のイメージに近いマスコットマーク、塩江町（香川県）の「ピカちゃん」、元気よく飛び回る姿を表現。

写真6：地元の特産品と組み合わせたマスコットマーク。イチゴを抱いて飛ぶ貴志川町（和歌山県）の「ホタ郎」。

写真7：雌雄の区別のある北房町（岡山県）の例。雌の成熟度に比べ幼い雄。

写真8：雌雄それぞれに愛称を持つ美郷村（徳島県）の例。ドレスアップしたカップル。下腹の発光部の様子は正確。

謝 辞

稿を終えるに当たり、資料請求依頼状の発送時にご協力いただきました川崎医療短期大学事務室庶務課主任、坪井裕子様、また、本稿取りまとめに際し図表作成、原稿清書に多大のご援助いただきました川崎医科大学現代医学教育博物館、藤原美郷様に深く感謝いたします。

参 考 文 献

- 1) 大場信義：ホタルの飼い方と観察，東京，ハート出版，1993.
- 2) 大場信義：ホタルの郷，札幌，共和コンクリート工業(株)，1995.
- 3) 大場信義：ホタルの里，東京，フレーベル館，1996.
- 4) 梶田博司：金蚕をめぐる最近の動き，高梁川流域の自然，15，23-25，1996.
- 5) 東海市ホタルの会：知多の自然誌 ほたる 10，1996.
- 6) 梶田博司：ホタルと観光事業，展示学，22，46-47，1996.

